

特別寄稿

看護倫理への旅

アン・J・デービス¹⁾

聞き取り・翻訳：多賀谷昭¹⁾，田中真木¹⁾

¹⁾ 長野県看護大学

長野県看護大学

第19巻別刷

2017年3月

看護倫理への旅

アン・J・デービス¹⁾

聞き取り・翻訳：多賀谷昭¹⁾，田中真木¹⁾

【要旨】 アン・デービス名誉教授の看護師および看護学者としての半生記である。英文学と哲学で身を立てるよう勧める親に背いて看護を選んだこと、その動機はアフリカでシュバイツァーと働くためだったこと、大きく人生を決定づけたのは、自身の選択とともに、さまざまな偶然や人との出会いであったこと、シュバイツァーの自伝を読んで以来、常に旅に憧れ、実行に移した大小の旅が人との出会いや人生の転機をもたらしたことが述べられている。具体的なエピソードを通して、臨床で体験した精神看護の面白さや、カリフォルニア大学や長野県看護大学での教員生活につながった自身の選択、重要な人々との出会い、自身を有名にした生命倫理の著書執筆の学術的・時代的背景、長野県看護大学にきた経緯とそこで見藤学長と一緒にした仕事、アイデアの提案と実現に関する日米間の社会文化的差異の観察などが語られている。

【キーワード】 看護学者，自叙伝，生命倫理，精神看護，キャリア

訳者まえがき

以下は、看護倫理の泰斗であり、本学とカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）の名誉教授である Anne J. Davis 先生の半生記の口述を翻訳したものです。お話は、2016年3月5日に海外研修の一環としてサンフランシスコ・タワーズのご自宅を訪問した本学の教員・大学院生たちに語られたものです。

なお、個人的なエピソードも伺いましたが、先生のご意向に従い、ここには看護師および看護学者としての先生のキャリアに関係することがらだけを収録しています。

文学から看護へ：

アフリカでSchweitzerと働くために

私が高校を卒業したとき、両親は、有名な女子大学の学費を出してくれました。そこでは英文学と哲学を専攻して博士号をとる予定でした。しかし、ニューヨー

クの北にあるこの有名な女子大学に私が在学したのは1年だけでした。私は、そこが好きではなかったのです。英文学が嫌いだった訳ではありません。英文学は今でも好きです。

私はその分野の博士号はとらないことに決めました。というのは、アフリカで働くヨーロッパ人医師 Albert Schweitzer の本を読んだからです。それは彼の自叙伝で、アフリカでの彼の仕事について書かれていました。彼がバッハのオルガン奏者であることにも私は感銘を受けました。そこで、アフリカに行って Schweitzer と働こうと心に決めたのです。問題はどうすればそれが実現できるかでした。

「大学を退学するならお金は一切出しません」と母は逆上しましたが、私は退学し、アフリカへ行く準備のための進学の方法を探しました。父が英文学の大学教授で、母は私が父と同じ道を進むことを望んだのですが、父は私が幸せならそれでよいという考えでした。

¹⁾ 長野県看護大学

私は結局、大学の看護師コースに行くことにしました。アフリカに行って Schweitzer と働き、さらに世界各地を見て歩くのが夢でした。それには、英文学の博士号を取るより看護師になる方がずっと役立つと思ったのです。当時は学費があまり高くなかったし、運よく奨学金も受けることができました。そこでの私の成績はまあまあで、ごく平凡な学生でした。

修士号取得まで：

セントルイスで精神看護と恋に落ちる

そのようにして私は大学の看護学課程を終えました。5年の課程もありましたが、あまり好きな内容がありませんでした。私は、精神看護コースを取りたいと思いました。当時、精神看護は別の課程になっていたのです。そこで、ミズーリ州のセントルイスに行き、精神看護を学びました。そこには素晴らしい教育課程があり、素晴らしい先生がいました。そして、私は精神看護という分野と恋に落ちたのです。その頃、看護学で最も重要な人物の何人かは精神看護の分野にいたのです。

それから、私は故郷のボストンに戻り、マククリーン病院という精神科病院で働きました。私の精神看護の先生がその病院の付属看護学校の出身だったからです。それはとても有名な病院で、精神障害を持つ多くの有名人が入院していました。病院での仕事は楽しかったのですが、働く前に考えていたほどには患者を援助できず、自分の知識不足を思い知らされました。患者の多くは統合失調症を患った若い女性でした。そこで、私は大学院に行って精神看護の修士号を取得したのです。それは私にとって非常に重要な経験となりました。

退役軍人精神科病院での試み：

退院支援とネコの効用

修士課程を終えて、私は退役軍人病院で1年間働きました。それは大きな建物がたくさんある巨大な病院で300人の患者がいました。私はその唯一の看護師であり、管理者でした。部下には精神科技術員と呼ばれる職員が大勢おり、彼らは精神病に関する知識を少しは持っていましたが、投薬は私が実施しなければなりませんでした。

そこは何でもできる場所でした。他に誰もいなかったのです。どんなアイデアでも試すことができました。だから私はいろいろなことをやってみたのです。私は患者同士のグループを作りました。患者は互いの名前も知らなかったのですが、グループを作れば、お互いに話そうになるだろうし、少なくともお互いを知るようになるだろうと思ったのです。

また、私は患者のアセスメントを行い、退院が可能な患者を選び出しました。退院できる患者の条件は、訪問したり連絡を取ったりする家族がいることや、服薬が可能であり、かつその効果がある患者である、というものでした。私はその条件を満たす患者グループを別にして、退院に向けた支援を行い、その効果のあった患者を退院させました。精神疾患について精神科技術員たちの理解は非常に限られていましたので、私はセミナーを開いて彼らを教育しました。そうしたこともあって、私はとても忙しく働きました。

ある日、私はネズミを見つけました。患者はすべて男性の退役軍人で、食堂から食べ物を部屋に持ち帰っていたため、ネズミが繁殖していたのです。ある日、患者と話していたら、ネズミが床を横切って走って行くのを見て、どうにかしなければと思いました。そうしたら、それから3日くらいして、ネコがやって来ました。このネコのおかげでとても面白いことが起こりました。何年も全く話さなかった患者が、ネコはどこかと尋ねたのです。これらの非常に重度のかつ慢性的な精神病を持つ人々のネコへの反応は非常に興味深いものでした。

やがて、ネコは3匹の子ネコを生みました。私は、ネコが妊娠していたとは知りませんでした。誰もが子ネコに夢中になりました。患者のこの反応は非常に面白いものでした。その後、私たちは委員会を組織してネコの家を造ったような気がします。そして、みんなが子ネコのために食べ物を持ってくることでネズミが増えてしまうという馬鹿げたことになりました。

とにかく、それは本当にすばらしいことでしたが、私にとって深刻な問題をもたらしました。そこは非常に厳格で官僚的かつ軍隊的な場所だったので、子ネコは連れて行かれてしまったのです。子ネコたちの存在は患者にとってなくてはならないものになっていたの

で、それはとても悲しいことでした。私はネコが有益であったという事実以外のことは気にしませんでした。病院側は「病院はネコがいるべき場所ではない」と言ったのです。そのまま居続ければ解雇されると思ったので、私は退職しました。もっといろいろなことをして患者の反応を見たかったのですが、私は1年でそこを辞め、ボストンからニューヨークに住まいを移しました。

博士課程受験の失敗にめげず ニューヨークの一年を楽しむ

ニューヨークでは博士課程を受験しました。精神看護についてもっと学びたいと思っていたのです。当時、ワシントンにあった国立精神衛生研究所は、精神看護の大学院教育を受けた看護師を確保するための奨学金を提供していました。ありがたいことに、私はこの奨学金で約6年間学校に通うことができました。

ニューヨークでは、コロンビア大学大学院の入学試験を受けました。面接の際、二人の教授から、試験の成績が悪くて博士にはなれないと言われました。そのとき発せられた言葉は“You are not doctoral material.”（あなたには博士の素質がない）でした。あまりにひどい言葉ですが、奨学金分の1年間の滞在は認めてくれました。

その一年は素晴らしいものでした。毎週金曜日の午後、たった50セント払うだけでカーネギーホールの世界的に有名な音楽が聞けたのです。さらに、コロンビア大学や、ニューヨークそのほかの場所で、たくさんコースを受講できました。それは私にとって充実した素晴らしい一年でした。

大陸横断の旅とサンフランシスコの休暇

ニューヨークにいた時、そこで知り合った Gabbie Berliner という女性から、サンフランシスコの両親の家で休暇を過ごさないかと誘われました。彼女の両親はヨーロッパに行っていて、帰ってくるまでそこに一緒に滞在できるというのです。それまで私はミシシッピ川より西に行ったことがありませんでした。精神看護を学んだセントルイスを流れているのがその川です。Gabbie の提案はとても面白そうに思えました。私は

コロンビア大学での一年を終えたところでした。そこで、持っていた中古車で米国の東海岸を南下し、南部を西へ向かいました。私は一人で運転し、キャンプまでしたのです。今はあの頃よりもっと分別があるのでそんな無茶はしません。それがどのくらい危険だったのか分かりませんが、幸い何も起こりませんでした。

アメリカ大陸横断には約6週間かかりました。途中ニューオーリンズに立ち寄って、大好きなジャズ音楽を楽しみました。コロラド山脈のドライブを楽しみ、保留地でアメリカインディアンと出会いました。また、ルイジアナ州カービルにも1日か2日滞在し、米国で最後のハンセン病患者の施設を訪ねました。

この興奮に満ちた大陸横断の旅の末、私はカリフォルニアに到着し、Gabbie Berliner の両親の素敵な家に滞在して、面白い人たちに会いました。Gabbie の父親は精神分析医だったので、そのつながりを通して多くの興味深い人びとに会うことができました。やがて Gabbie の両親がヨーロッパから帰ってきたので、私はある場所に部屋を借りました。そうこうする間に、私はラングレーポーター病院という UCSF の精神科病院に連絡して看護師の職を得ていました。往路は南のルートを取り、復路は雪が消えてから北のルートを取るというのが私の計画で、それまでその病院で働くことにしたのです。

Mariam Kaufman先生と出会ってUCSFの教員に

ある日、私がカフェテリアで昼食を取っていると、一人の女性がいろいろ質問をしてきました。どこで教育を受けたか、どのレベルの教育を受けたかといった質問でした。近くにいた人に後で尋ねたところ、その人は Mariam Kaufman という名前で、UCSF 看護学部 の精神看護学課程の担当者だということがわかりました。

1日か2日後に私の仕事場に電話があり Mariam のオフィスに呼ばれ、教員になってほしいと言われました。私は東海岸に帰るつもりだったので断りました。だって病院の看護師なら自由に動けますが、教員になってしまうと途中で辞めることはできません。

実は UCSF の看護学部では途中で抜けた教員の後を補充できずに困っていたところに、修士号を持つ私

が現れたのでした。当時（1956年か翌年）、修士号取得者は非常に希だったのです。彼女は「今年度だけでも教えてくれれば…」と言いました。その時は12月で、翌年6月までならできそうだと思います。彼らは本当に私を必要としており、目の前で看護学部長が懇願しているのです。とうとう私は教えることを承諾しました。

Kaufman先生は私のキャリアにとってとても重要な人になりました。彼女は極めて高度な教育を受けており、看護学だけでなく、学問一般に通じていました。非常に古典的な教育でしか習わないような、ギリシャ語、ラテン語、文学にも通じていました。

そうした彼女とのつきあいはとても楽しいものでした。彼女は、もし私が教員になれば、毎週1時間会って、精神看護の教育に関するどんなことでも話してあげようと言いました。私の担当は、学部生向けの非常に重要な教育でした。私たちは教育課程の内容や学生、教授方法について話し合いました。毎週、彼女と会うことで、私は素晴らしい教育を受けたのです。

完全に自由な二年間： 中東とヨーロッパへの旅

そうしている間も、アフリカに行きたいという思いは持ち続けていました。その間にAlbert Schweitzerが死んでしまったので、最初の計画はあきらめざるを得ませんでした。いつか行こうと思っていました。UCSFの学部学生を教えるのはとても面白い経験でしたが、世界中を見て回りたいという思いは捨てきれませんでした。そこで、3年間UCSFで教えた後、退職して、中東を1年間、ヨーロッパを1年間旅行しました。中東ではイスラエルに住みました。ニューヨークのブルックリンからオランダの貨物船に乗り、エジプトのポート・サイドで下船しました。エジプトではアブ・シンベルのピラミッドやルクソール王家の谷の遺跡、その他、観光客が見ることができる全てを見ました。それはすばらしい経験でした。エジプトの友人にも会いました。それからヨルダン、シリア、レバノン、キプロスに行き、そこから船で一晩過ごしてイスラエルのハイファに上陸しました。

イスラエルに滞在した1年間に、私は三つのこと

をしました。私が住んでいたのは共同農場のキブツで、きわめてイスラエル的な場所です。キブツで共同生活をしている間に、私はちょっとした研究をしました。テーマはキブツの文化におけるプライバシーの交渉です。すべての共有が原則のキブツでは、プライバシーがほとんどありません。まああのプライバシーを確保するための交渉の仕方を学ばなければなりません。それに関する私の論文は社会科学の学術誌に掲載されました。もう一つの研究活動は、ガリラヤ海のティベリアの近くのハマートという場所で考古学的な発掘調査に参加したことです。そこは聖書に出てくる非常に重要な場所です。それはとても面白い経験で、考古学を少し学び、素敵な人々に会うことができました。

それから、私は保健省で働いていたPhyllis Palkieという人類学者に出会い、彼女に頼まれて、かなり長い間、ヴァリヤコブ病院の看護師に精神看護を教えました。その病院へは、Ruth Rondという女性のバイクの後ろに乗せてもらって通いました。

以上が私のイスラエルでの三つの経験です。その後、私はトルコの船でイスラエルを発ち、ヨーロッパの多くの国を訪問しました。ブルガリアにも行きましたし、いろいろ奇妙な場所にも行きました。そうやって1年かけてヨーロッパを見て回りました。

その年が終わりに近づいたころ、私は家に帰ろうかと迷うようになりました。完全に自由な二年間を過ごし、私は思い通りのことができました。人生でそのような経験を持つことは非常に珍しいことでしょう。その旅も終わりに近づいて、私は帰ることを決めかねていたのです。

ロンドン滞在中にケネディ大統領の暗殺のニュースをテレビで見たとき、私の心の中で、旅行は終わりを告げました。その時、精神科看護師の友人と滞在していたのですが、私はいたたまれなくなり、家に帰りたかったです。ロンドンには素晴らしい街で大好きです。だから自分のこの反応はあまりよく理解できないのですが、とにかく家から離れているのが恐ろしいことに思えたのです。テレビでジャック・ルビーがオズワルドを殺したのを見たら、みんながみんなを殺し回っているように思えたのです。「一体どうなっているの？家に帰りたい！」と思いました。

教師になるために博士課程へ： バークレー校での二足のわらじ

そこで私は帰国しましたが、旅の間に、私は心から教師になりたいと思うようになっていました。そう思えるようになるまで2年間もかかったわけです。大学の教員になるためには博士の学位が必要でした。そこで、帰国して真っ先に大学院に行きました。その年は、夏には精神看護学の教員のためのコースを教え、夏以外の時期は学生として過ごしました。私がいたのはカリフォルニア大学バークレー校で、偉大な名門校ですが、大学院生の私が夏には教員向けコースを教えたのです。それはとても面白い経験でした。

私は1968年に博士の学位を取得しました。1931年生まれのは私は、博士課程に入る前に3年間の教員生活と2年間の旅行があったので、ほとんどの学生より年上でした。私はバークレーで4年間学ぶことができるお金を持っていました。そのころ、言論の自由とベトナム反戦の運動でキャンパスは混沌としていました。いろいろなことが起こる中、勉強に集中するのはとても難しいことでした。そこに立ち会うのは面白さと同時に困難も多い時代でした。当時の学生の抗議運動は、合衆国の歴史にとって非常に重要なものでした。

私が学位を取ってUCSFに戻ったとき、私たちは学部プログラムを持たないことに決めました。その時サンフランシスコ大学にも、サンフランシスコ州立大学にも、サミュエルメリット大学にも学部課程がありましたが、博士課程を持つことができたのはUCSFだけでした。そこで私たちは大学院の修士課程と博士課程だけを持つことに決めたのです。

ハーバードでのポスドクで書いた本で一躍時の人に

バークレーでの博士課程を終えた私は、UCSFに戻って精神看護を教えました。そしてある日、社会学者のVirginia Olsenと良い友人になりました。いま私の隣室に住んでいるのがその人です。彼女は医療社会学者で、女性の健康に関して多くの仕事をしています。そのころ彼女はUCSFの社会行動科学の教授でした。

ある日、彼女はキャンパス内の別の建物に行って乗ったエレベーターがとても遅かったので、待ってい

る間に掲示板を読むことができました。そこで彼女はハーバード大学で募集していたフェローシップについての掲示物を読み、それを掲示板から外して私に届け、「これに興味があるのでは」と言いました。それは生命倫理学のポスドクで、ケネディ財団が資金提供することになっていました。ケネディ大統領の妹のEunice Kennedy Shriverがこのプログラムを担当していました。非常に興味深いものだったので、早速財団に電話をかけていろいろ尋ねました。すると「どうぞ応募してください」と言われたので、さっそく応募したのです。

するとある日、ワシントンに来られるかという電話がありました。ケネディ財団のあるワシントンで面接があり、旅費も支払うということでした。それは、少なくとも私の採用が検討されることを意味していました。財団は、4人分のフェローシップに対して応募した12人を面接に呼びました。一部の人はずぐに帰され、6人が残り、最後に4人が採用されました。そこで、私はハーバード大学に行きました。ハーバード大学は、米国で最も古い非常に有名な大学で、私の故郷のボストンにあります。(温暖なこのサンフランシスコと違って、)ボストンの冬の天気は、みじめでひどいものですけれど。

その年にハーバード大学で生命倫理学のポスドクをやった看護師は、私とMyla Rosescarの二人でした。看護学や医学において、倫理は昔からの分野で、ごくありふれた事柄ですが、統合された知識体系にはなっていませんでした。つまり、生命倫理という学問は確立していなかったのです。それは、米国やその他の場所で始まったばかりでした。私たち二人はちょうどその黎明期にポスドクの研究をすることになったのです。一種の先駆者の役割を果たすことになった私たちに、ハーバードでのポスドクは格好の環境を準備してくれました。

私たちは研究プロジェクトを決める必要がありました。私はMylaに「フェローシップの一年間に何をやるつもり？」と尋ねました。彼女は「何かカリキュラムに関係したことかな」と言いました。これを聞いて私は「それだ！」と思いました。当時、生命倫理のカリキュラムに使える本がありませんでした。あるのは

非常に古い本だけで、形式も内容も時代遅れになっていました。だから私たちがその本を書くべきだと思ったのです。

Mylaは「十分な知識もないのに、本を書くなんて！」と言いましたが、私は「それでも、とにかくやってみよう。書きながら勉強すれば、何とかなるわよ」と言い、執筆を始めました。この種の本はほかになかったので、出版社も大いに興味を持ってくれました。そこで私たちは、勉強しながら生命倫理の本を書いてその一年を過ごしました。

ハーバード大学でのポストクの一年間の終わりに、私は出版社宛ての原稿を投函して空港に向かい、ポストンからサンフランシスコを経て、初めて日本に到着しました。それは、東京でICNが開催された1977年のことでした。それに参加するために、原稿を出版社に持って行く時間がなく、郵送したのです。

その本は学問分野にとっただけでなく、著者である私たち二人のキャリアにとっても非常に重要なものになりました。私たちは時の人となり、いろいろなところに招待されて、とても忙しくなりました。そうやってポストクを終え、私はUCSFに戻りました。

国際色豊かな教え子や友人たち

UCSFに戻ってからの私は、精神看護ではなく、国際的ないし異文化間の健康問題と看護倫理を修士と博士のクラスだけで教えました。

UCSFで私は多くの博士課程の学生を指導しました。Hiroko Minami(南裕子)もその一人です。私が彼女と出会ったのはイスラエルです。それは二年間の放浪旅行より後で訪問した時のことでした。当時彼女はイスラエルの学生で、そこで疫学と公衆衛生の修士号を取得したのです。なんと珍しい女性だろうと思いました。まさかイスラエルで日本の女性と出会うとは想像していませんでした。イスラエルではMiriam Hirschfeldにも会いました。彼女はHirokoと友達でした。後にHiroko Minamiは日本の看護界のリーダーとして世界的に活躍し、アジア人として二人目のICNの会長になりました。

その後、Miriamは修士と博士号取得のためにUCSFに来ましたが、Hirokoはイスラエルで修士号

を取得した後、博士号取得は計画していませんでした。UCSFに来るよう私は何度も彼女に手紙を書きました。彼女は高知女子大学におり、当時電子メールはなかったもので、何通もタイプライターを打ちました。「UCSFに来て博士を取りなさい。今後仕事で生きていくには博士号が必要です」と言い続けましたが、彼女の返事はいつも「忙しすぎて今は無理です」でした。私はついに「忙しい」という言葉は忘れなさい。戻るまで放っておけばよい。とにかく来て博士号を取らないと駄目です」といいました。

それで、ようやく彼女はUCSFにやって来て、土井の“甘え”概念に関する初の実証的研究を行いました。彼女は非常に洗練された研究者で、とてもよい研究をしました。

彼女が博士号を取りに来ていた期間、私はサバチカルを得てアフリカに行きました。何年もかかって念願がかない、ついに私はアフリカの地を踏んだのです。それはWHOの仕事をするためでした。

アフリカ大陸は東西南北の四地域に分けられ、北アフリカはほとんどアラブ圏です。私が行ったのは西アフリカのサハラ以南にあるガーナで、すばらしいところでした。ナイジェリアは現在多くの問題を抱えていますが、ガーナにはあまり問題はないようです。それから自然公園がたくさんある東海岸のケニアにも行きました。

それはとても面白い年になりました。アフリカでWHOのためにした研究はネイティブ・ヒーラーの役割と精神医学についてのものです。ネイティブ・ヒーラーは、よく呪術医 witch doctor と呼ばれますが、それは残念な呼び方だと思います。

その間にHirokoは博士課程を終えて帰国しました。Noriko Katada(片田範子)もUCSFで博士号を取得しました。二人とも日本の看護学に大きな貢献をしました。

当時のUCSFで教員をしていて素晴らしかったのは、世界中から学生が博士課程に来ていたことでした。出身国は非常に国際的で、エチオピア、オーストラリア、ニュージーランド、日本、そしてスイス、ノルウェーなどのヨーロッパ諸国でした。これらの人々と知り合うことは、私自身に対する本当に素敵な教育で

した。私は22年前に引退したので、今のUCSFの状況はよくわかりません。毎年、学部長主催の名誉教授昼食会で大学の現状について聞けますが、昨年は股関節に問題が起きて、参加しませんでした。

これまでに私は、ヨーロッパのすべての国に行きました。最後に行ったのはアルバニアで、それは長い間外国人が行けなかった場所です。ロシアには5回行きました。中国には27年連続して訪れました。Lin Ju Yingという素晴らしい友人が北京にいたのです。彼女には3人の息子がいて、その長男の息子のSinsinは6ヶ月の赤ん坊のときから知っています。彼は今32歳で、夫婦両方の両親と北京に住んでいます。彼と彼の家族はこの6月にサンフランシスコへ来ることになっています。彼は私をgrandmaと呼びます。彼と彼の妻は、前にも一度ここを訪れました。とても素敵な人たちです。

カリフォルニア大学を優遇早期退職して日本へ

Hirokoは博士課程を終えて帰国した後、何かの会議で合衆国を再訪しました。そのとき彼女とつぎのような会話をしました。「日本に来て教えてくださいませんか?」「行けるかどうかは分かりません。私はまだUCSFで働いているので、行くとしても区切りをつけるのにだいぶ時間がかかるでしょう。」「それでは、退職したら。」そのとき私はまだ退職は考えていませんでした。

カリフォルニア大学に定年はなく、私は65歳くらいで退職するつもりでした。それが近づいたころ、Hirokoは私が日本に来るかどうかを知りたがりました。日本では新しい看護大学が次々に開学を迎えており、教員が不足していました。私は「考えさせて」と答えました。私は決してドアを閉じることはしません(“No”とは言いません)。

そのころ、カリフォルニア大学は財政的な困難に陥り、高給の教員の退職を望んでいました。34年間勤めた私の給料は最上位だったので、何度か早期退職の勧奨がありました。その最初の勧奨は断りました。補助金を受けた研究が進行中だったし、指導中の博士課程の学生もいたからです。2回目の勧奨は条件が良くありませんでした。そして3回目。これが最後かもし

れないと言われました。その時までには私は大学院生を取るのを止め、すべての研究を終えて、退職できる準備が整っていました。最後の決定を下す前に専門家に相談すると、70歳までいても経済的には得にならないだろうと言われたので、62歳で引退しました。

Takako Mitohとの出会い

Hirokoは以前私に日本に来てほしいと言っていました。彼女が学長を務める兵庫県立看護大学にはすでにPat Underwoodがいるので、私を呼ぶことはできないと言いました。PatはUCSFで私が博士の指導をした一人です。そこで、Hirokoの紹介でTakako Mitoh(見藤隆子)とスペインのマドリッドで開かれたICNの大会で初めて会い、彼女と仕事をすることになったのです。それは日本に行く前の1年か2年くらい前のことで、まずスウェーデンに行ってから日本に行きました。

マドリッドで私はTakako Mitohと会いましたが、私は日本語が全く分からず、彼女も当時はそんなに英語が上手ではなかったため、意思疎通は困難でした。彼女は基礎看護学を教えると言いましたが、私はベッドメイキング等が得意でないし、それを教えたいとも思いませんでした。私はもっと抽象的なことを扱う方が得意です。居合わせたNoriko Katadaに「Mitohは基礎看護学を教えると言いますが、私には出来ません」と言いました。するとMitohは“Yes you can, yes you can, you can teach. You know the content.”と言いつづきました。ともかく、Mitohが言わんとしていたことをNorikoが私に説明してくれたので、それなら私にできるかもしれないと思い、「考えてみます」と返事をしました。

ちょうどその頃、経緯は忘れましたが、生命倫理に興味を持つHoshinoという精神科医にアメリカで会い、日本に行つてある会で講演するよう招待されていました。そこで私はMitohに「ちょうど日本に行く予定があるので、駒ヶ根を見たいと思います」と言いました。(訳註:Hoshinoは星野一正京都大学名誉教授。実際は精神科医ではなく解剖学および生命倫理学の研究者で、献体や医療における本人の意思を尊重する運動を主導し、当時は京都女子大学国際バイオエシックス

ス研究センター長であった。日本生命倫理学会長として自ら企画し 1993 年 12 月 14-15 日に開催した国際シンポジウム "Global Concerns in AIDS: Bioethical Issues" に Davis 先生を招待した。）

The Moon Dog：駒ヶ根は何処に？

その駒ヶ根は簡単には見つかりませんでした。街中、地図を探しました。友人の Virginia は国際色豊かな本を売っている書店にも行きましたが、見つかりませんでした。最後は知り合い全員に探してもらいました。その一人がやっと目的の地図を見つけ、Komagane と呼ばれる場所が実在することを確認できたのです。それから、私は東京で開かれた会合で講演するために日本に行きました。空港には Mitoh の姪（坂川先生の娘さん）が出迎えて都内まで連れて行ってくれ、東京で Mitoh と会いました。

私を東京から駒ヶ根に連れて行ってくれたのは Mrs. Kitayama（北山三津子）でした。私たちはまず電車で諏訪まで行き、そこで通訳と運転手を含む 4 人で昼食を取った後、雪が降る中を、自動車で駒ヶ根に向かいました。計画通り簡単に駒ヶ根に着いたので、そこへ行くのは大変だろうと思っていた私は、拍子抜けしてしまいました。これがあの moon dog（幻月）のように、人里離れて存在する小さな町だと思っていた場所だったので。

私はずっと都会に住んでいて、東京や京都のような街の活気が好きです。そこで、私は Mitoh に「2 年だけ来ます」と言いました。1 年では短すぎると思ったので 2 年と言ったのです。一方で、私はスウェーデンに行つて仕事をする約束がありました。先方の希望は 6 か月でしたが、日本に行くことになったので 4 か月にしました。そこで、ストックホルムに滞在し、オスター大学にあるスウェーデン唯一の生命倫理センターで興味深い仕事をしました。

スウェーデンから帰国して、すぐに荷造りをして日本に行きました。日本には 2 年だけと言っていたのに、結局 6 年半いました。

長野県看護大学での活動

長野県看護大学（NCN）にいた間、私はいくつかのことをしました。私はスノーケリングが好きで、サモアに行く計画を立てました。合衆国から日本に来て働いていた友人の Marcia Petrini と一緒に行くことにしましたが、Marcia にはサモアの看護師に知り合いがいたので、私は NCN の学生を連れて行こうと思いましたが、全く異なる文化に触れることは学生にとってよい経験になると考えたのです。私は 6 人の学部生をサモアに連れて行きました。（訳註：時期は 1998 年 8 月。Marcia Petrini は当時山口県立大学教授。）

帰国後、私は Mitoh に「良いアイデアがあるので聞いてほしい」と言い、カフェテリアに二人で座って話をしました。「この大学とサモア国立大学は交流関係をもつべきです」と私は言いました。彼女は「それにはお金がかかります」と言いました。私は「それはあなたの仕事です。私はアメリカでなら資金調達ができますが、日本では方法を知らないで、あなたがしなければなりません」と言い、この交流にどのような利益があるかを話しました。そして私は Mitoh と Tagaya（多賀谷昭）と一緒にサモアを再訪して交流関係を構築しました。

合衆国からは、日本学術振興会の補助金で二人のポスドクを招聘しました。過去 5 年以内に博士号を取得した米国人というのがその補助金の条件でした。

また、International Research Center in Cross-cultural Nursing も私のアイデアでした。（訳註：異文化看護国際研究センター。その後、看護実践国際研究センターに発展し、その異文化看護国際研究部門になった。）

NCN で教えた最後の年は 2002 年で、3 か月だけ駒ヶ根に滞在しました。その後も毎年、日本に行きました。2014 年は NCN の 20 周年のシンポジウムと日本看護科学学会の講演などで 2 回日本に行きましたが、尋常ではない疲労を感じました。私も間もなく 85 歳です。以前よりずっと疲れやすくなりました。私は 2014 年 12 月に日本で誕生日迎えたとき、「日本にはもう来られません」と言いました。そして「遊びになら来られるかもしれないけれど」と付け加えました。しかし、私はそれ以来日本に戻っていません。

アイデアの提案と実現に関する日米の文化的差異

私は日本で素晴らしい時間を過ごし、素敵な人々と出会いました。そのことを本当にありがたく思っています。そういえば、Tagaya は私に大事なことを言いました。あるとき、内容は忘れましたが、私の素晴らしい提案を Mitoh が退けたことがありました。そこで、Tagaya の部屋に行き、「Mitoh は駄目だと言った。彼女は間違っている」と文句を言ったら、Tagaya は「でも Anne, Mitoh は人の言葉にいつも耳を傾けます。それは普通のことではありません」と言ったのです。それ以来 Mitoh に不平を持つのはやめました。彼女は日本の社会的決定のシステムを熟知していて、提案を退けるのはいつも、「それが決してシステムを通らないから」でした。実際、Mitoh は私の多くの提案を採用してくれました。Windows on the World という国際研究集会の開催もその一つです。（訳註：2003年10月開催の「新しい風：アジア・太平洋地域の看護学国際協力」Windows on the World: Asia-Pacific Regional Conference on Collaboration in Cross-Cultural Nursing.）

私が多くのアイデアを思いつくのは、さまざまなアイデアをもつことが許され、それが実現するのを見ることができる UCSF で 34 年間で過ごしたからです。そこでは、どんなアイデアでも試すことができました。ただし、すべて自分でやらなければならないので無制限に試せるわけではありません。

UCSF も他の場所と同様に多くの問題を抱えていますが、素晴らしい美点がたくさんあります。その一つは、やりたいことを自由に行えるということです。授業さえきちんとしている限り、何をやろうと自由です。関係する委員会を通す必要がありますが、委員会が認めさえすれば、何でもできます。物事を試し、新しいアイデアを試してみるにはとても良い場所で、私は UCSF のそういうところが好きです。

訳者あとがき

この日は、このお話をうかがう前にご自宅のあるサンフランシスコ・タワーズ内のクリニックやケア施設、図書館、集会場、プール、文化活動施設等の見学を手配していただき、お話の後には豪華な食堂で研修参加

者全員に昼食をご馳走していただきました。

お話には出てきませんでしたが、この海外研修の道を開いてくださったのも Davis 先生で、参加者が見聞を広げるとともに、本学の大学院の入学志願者が増えるよう願ってのアイデアでした。その実現を念じて毎年、参加者を歓待し、最大限の援助を続けてくださっているデービス先生の熱い思いを感じた訪問でした。

なお、不自然さを避けるため、文中に登場する人名は、一部の例外を除いて、デービス先生が話された通り、敬称をつけずに記載しました。

【Special Contribution】

Travel to Nursing Ethics

Anne J. Davis ¹⁾

Transcription & Translation: Akira Tagaya ¹⁾, Maki Tanaka ¹⁾

¹⁾Nagano College of Nursing

【Abstract】 Dr. Anne J. Davis, Professor Emerita of Nagano College of Nursing (NCN) and University of California at San Francisco (UCSF), dictated her own professional life after graduating from high school to the present. Through various episodes readers will understand why and how she became a nurse, a teacher at UCSF, and a famous scholar in nursing ethics, and why and how she came to NCN where she stayed for 6.5 years.

She chose nursing to go to Africa to work with Albert Schweitzer when she read his autobiography. It did not come true because of Schweitzer's death but she visited many places inside and outside of the United States, where she tried various aspects of her possibilities and met many important persons. The encounters with those persons, as well as her own decisions and some historical coincidences were determinants of her career in nursing.

The content includes the fun of clinical nursing in a veteran's psychiatric hospital, an adventurous drive from New York to San Francisco, an encounter with Mariam Kaufman who recruited Anne to teach nursing to undergraduate student at UCSF, a two-year travel to Middle East and Europe with complete freedom, the academic and historical background of writing a book in bioethics that made her famous, and encounters with Miriam Hirschfeld, Hiroko Minami, Noriko Katada, and Takako Mitoh. It also includes what she did in NCN with President Mitoh and her observation of socio-cultural difference in having and testing ideas between the United States and Japan.

【Keywords】 nursing scholar, autobiography, bioethics, psychiatric nursing, professional career

多賀谷昭
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
E-mail: tagaya@nagano-nurs.ac.jp
Akira Tagaya
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, Nagano, 399-4117 JAPAN
E-mail: tagaya@nagano-nurs.ac.jp